

貧困の社会学的研究の系譜

高橋伸一

目次

序

- 一、実態分析と社会病理学の導入―昭和二十年代―
- 二、社会問題と社会病理学の混乱―昭和三十年代―
- 三、対立の激化と現代的貧困の発展―昭和四十年代から今日まで―

序

街の中を新型の乗用車がスマートに走っている景色を見ると「日本も豊かになった」と思ってしまう。その反対に、先程の新車を運転していた青年が、炊事する場所も完備していないような、四・五畳の安アパートでひっそりと、インスタント・ラーメンで食事を済ませていることを聞くと、「現代的貧困ここにあり」と考えたりする。こんな例は他にもある。華やかになった家庭電化、それらを使いこなせず、氷と残ったおかずしか入っていない大きめの冷蔵庫。機械化された農作業、農機具購入のために借りた金が返せず、一家そろって都会に出稼ぎする農家。こ

んなちぐはぐな世の中は過去に例があつたのだろうか、恐らく、現代ほど激しくものの価値観が変動する時代はなかったであらう。

このような現代社会を、社会学ではその個別社会学によって（家族社会学、都市社会学、農村社会学、社会病理学など）多面的に分析している。しかし、その分析は単なる「説明」に終始してしまっており、社会科学がその課題とする「予見」的分析には、いまだ至っていないようだ。我われは、社会がどのような方向に発展していきつつあるのかを、科学的にとらえる必要があるとすれば、現代社会に発生する諸矛盾を、全体的、体系的に把握することをせねばならない。

以上のような問題意識を出発点として、現代社会における諸矛盾を、経済学において一貫して研究されてきた貧困実態に対して、（経済学は貧困をプロセスとして分析し、社会事業学が貧困を結果の分析にあたるという意味ではなく、比較的にそういった傾向が強いという意味である。貧困問題は他の問題同様に、変動的側面としての貧困化と、静態的側面としての実態分析の両者を統一し研究を前進させ得る。）社会学においては、どのような研究を進めてきたのか、その理論的変化、対象の変化について、系譜的に整理するのが本小論の課題である。一般的にいつて、社会学は実践的課題に対して軽視する傾向が強い。あるいは、歴史性に欠けるとも批判されてきたことは明らかである。しかし、そういったマイナスイ面があるにしても、現代社会の貧困を真に理解するには社会学は必要不可欠ではなからうか。なぜならば、現代社会における貧困は、マルクスの窮乏化法則における諸理論だけでは、対象を正確に分析することが困難となり、経済学や社会政策学などにおいても、新しいフレームワークが構築されようとしているからである。

ゆえに、社会学の側からの過去の貧困研究を整理して、その理論成果、あるいは社会学の超歴史性から生じてい

る、社会学の限界性を明らかにするのは、まさに今日の課題だといえよう。

さて小論においては、社会学的研究の系譜がその課題であることを先に述べたが、この課題を満足させるには、当然、時系列的なものとしては戦前からの研究にも及ぶべきであるかと思う。また貧困の研究が社会学以外の隣接科学、特に経済学や社会政策学などによって、実践的に研究されてきたこと、あるいは系譜付けにおける基礎的必要性からも、これら二点は欠いてはならないと痛感される。小論では、時系列的には戦後から現代までに限定し、隣接科学の研究は余りにも量的、質的に多いので特に触れなかった。

〈時代区分〉

1、実態分析と社会病理学の導入。

(昭和二十年代)

2、社会問題と社会病理学の混乱。

(昭和三十年代)

3、対立の激化と現代的貧困の発展。

(昭和四十年代から今日まで)

以上の三期に分けてみた。昭和二十年代は、戦争による生活破壊、食糧難、住宅難から発生した、都市におけるスラムなどの貧困現象を対象にした問題から、アメリカ社会学において発展した社会病理学の導入に象徴される時期。昭和三十年代は、政府、特に厚生省を中心とした行政面から、ボーダー・ライン層の問題が出され、社会保障要求運動の高まりに対応する一方、「高度成長」により「消費革命」が歌われた年代である。昭和五年の安保斗争を前後に、マルクス主義社会学の台頭、そして彼らからの社会学批判がこの年代の特徴である。昭和四十年代は

社会病理学における多くの実態分析による流れに対し、そこにおける社会問題としての、運動論的視点の欠除が批判され、ある意味で対立の時代といえよう。しかしその対立が貧困化の新しい発生により、統一しようという動きもあらわれた。

このような時代区分で、各年代に発表された代表的な貧困研究を概観してみよう。

一、実態分析と社会病理学の導入（昭和20年代）

第二次大戦による敗北により、日本は経済的にも精神的にも壊滅的な打撃を受けた。その打撃は、生活力の乏しい婦人、年少者において一段と悲惨な生活を余儀なくさせた。彼らは売春、非行、浮浪者となり、解体地域としてのスラムに流入していった。昭和二五年に朝鮮戦争が始まり、日本の経済は復興のきざしを見せはじめた。

社会学では二八年に村落社会研究会、翌二九年には都市社会学会がそれぞれ創立した。それ以前に地域の学会として、関東、東北、西部、関西などの各学会が発足している。

二十年代後半に入り、世界的不況と朝鮮休戦による特需の減少により、社会不安は極度に増大した。貧困研究はその社会的不安から、国民の社会保障の切実な要求と重なり各分野の研究がなされた。窮乏化論争が行なわれたしたのは二七・八年ごろからであり、政府のボーダーライン層の概念もこの頃に出された。

そのような経済学、社会事業学の研究に対して社会学者では次の研究がある。

- ・綿貫譲治「最低生活の研究」（二七年）社会保障研究第二二巻一号
- ・富田富士雄「社会学における貧困との斗争」（二八年）ソシエテ創刊号
- ・関清秀「母子世帯及び要保護者の生活」（二八年）北海道生活白書。

・磯村英一『社会病理学』（一九二九年）有斐閣

・横山定雄「要保護性をめぐる社会的背景とその認識について」（一九二九年）立教大学文学部社会科学科研究紀要（一）

・中本博通「要保護世帯の家族的特質（上・中・下）——大津市二一八世帯の場合——」（一九二九年）社会問題研究

・高倉又二「被保護層の構造的特質」（一九二九年）都市問題四六卷四号

・作田啓一「アノミイの概念」（一九二九年）社会学評論一三—四号

・那須宗一「麻薬に魅せられた人々」（一九二九年）婦人公論八

・吉田久一「日本スラムの初発と地方下層社会」（一九二九年）社会学評論一六集

・園直樹「都市に於ける貧困の問題」（一九二九年）西京大学学術報告人文四号

この時代は小関三平氏が『社会病理学と都市底辺』^②において指適するように、アメリカ社会病理学の日本への直接輸入の時期であった。社会学はその伝統として、細井和喜蔵、横山源之助に代表される優れて実践的、社会問題論的なアプローチを受けつぎ発展させるべきであったが、このアメリカ社会病理学の導入は社会学から体制を抜きとり、単なる説明概念としての役割を荷うだけとなった。その意味において社会学における貧困研究は隣接社会科学の貧困研究にくらべ著しい遅れを生じた。

ここで社会病理学を日本に導入し発展させた磯村英一氏の貧困研究を、若干分析することによって二十年代の社会学的貧困研究の特徴をみる。

磯村氏は社会病理現象の基本的事実として人口の過剰を考える。氏の太平洋戦争に対する理解は次のようだ。^③

「太平洋戦争の勃発の原因は、現象的に見て、当時の日本の政治家や軍人が誤った方策によるとはいえ、彼等をしてそのような方策をとらしめたものは、日本の人口の絶対的な増加であり、相対的過剰の現象であった。」

磯村氏における「社会病理現象の基本的事実」とは、社会病理現象の本質的要求という意味であろう、だとすれば、太平洋戦争に対し、『人口論』におけるマルサスのように、人口の増減が所与の社会的発展や方向を規定する結果となってしまう。そこには、日本の独占資本と結んだ軍部独裁による他民族への経済的かつ武力的侵略の本質が無視されてしまっている。

そのような超歴史性を保持しつつも、磯村氏はスラムを都市の解体現象としてとらえ、アメリカ社会病理学の方法論をもって日本の貧困を都市問題として発展させていった。そこで、磯村氏における貧困を、もう少し考察してみよう。

彼は、貧困を誰しもがうなずく社会病理現象であるとする。そして社会病理とは次のようなものを対象と考える。^④
まず、

①働く意志のあるもの

イ、先天的にその能力のないもの、(乳幼児、未成年者、老人)

ロ、後天的原因により能力を欠くもの(不具、疾病、廃疾、傷害者)

ハ、後天的原因により能力を発揮できないもの(失業者)

二、働く意志のないもの

イ、ルンペン

ロ、精神病患者

以上のような分類をして、

「このうち乳幼児・未成年者・老人などは将来あるいは過去においてその社会の生産に寄与するもの、又は寄与

したものであるから、社会の病理的対象とはいえない。失業者は、その属する社会がこれらに働く機会すなわち職業を与えれば、その生活は少くとも最低の生活は維持できるものである。結局働く意志があっても、不具であり廃疾であり、疾病、傷害の状態にあるものは、長期にわたって生活能力を回復することのできない成員であるから、働く意志のないルンペン・プロレタリアと共に社会病理の対象となる。

かくする貧困という生理的最低生活も維持困難な状態は、働く意志のないルンペン・精神病患者及び後天的原因によって能力を欠く不具・廃疾等が規則的に指標となる。次には生活能力を持っていながら職業を得られないために、又職業に従事していてもその収入が生理的最低生活も維持できない場合も貧困の状態として考えられる。

これは資本主義社会における社会病理の一つの特性といわねばならない。個人の病理ではなくして資本主義社会そのものの病理である。」

このような貧困の把握の仕方にはラウントリ^⑤の貧困概念、ならびに磯村氏の東京都民生局長の経験と深くかかわっている。すなわち貧困を現象的個別的にとらえ、貧困の原因的、プロセス的な接近が乏しい。また働く意志の有無による非生産的成員の分類は戦後社会の一般的風徴を加味したとしても、納得できない、そこには一九世紀イギリスの救貧法の遺物をみるようである。

磯村氏における貧困は結局のところ、それ自身、貧困現象、貧困化現象が病理の直接的、基本的対象ではなく、彼のいう「血縁的現象」「意識的現象」を客体としてとらえ、そこにおける個人又は集団の属性及び機能の偏倚状態を診断する社会病理学の基本的事実として貧困をとりあげるものであった。また社会病理学は、社会病理現象の科学的分析をなし、これに社会的診断を下すものであって、必ずしもこれら病理現象に対する対症療法をいうものではないとし、その任を他の科学の分担する領域であると述べるに至っている。ここに「社会問題への対決を経済^⑦

学や社会政策学に委ねる」というマルクス主義者、マルクス主義社会学者からのブルジョア社会学批判が寄せられる。

二、社会問題と社会病理学の混乱 ——昭和三十年代——

三十年代における政治的、経済的なハイライトは三五年の日米安保条約であろう、安保反対運動の歴史的高揚の波はあらゆる社会に波及した。社会学においても例外ではなく、学会、研究会においても抗議の「決議文」^⑧が発表されたりした。

社会学者におけるマルクス主義的立場を主張する人びとが増加したのもこの三十年代半ばである。北川隆吉、芥川集一、田中清助らの『講座現代社会学』（全三巻）ではアメリカ社会学を主流とする機能主義的社会学に対決しようとするマルクス社会学の姿勢が明確に示されているし。また真田是、河村望、宇津栄祐、細谷昂、布施鉄治等、マルクス主義に立った若手の研究も発表されてきた。

一方経済面では三五年には自民党政府による「高度成長」「国民所得倍增政策」が発表され、産業構造の变革を中心に都市化、人口の過疎過密化、農業破壊、石炭産業のスクラップ化などが開始された。大衆生活においては耐久消費財、家庭電化時代が本格化し、生活様式が「革命」され始める。

貧困研究においては二十年代後半にアメリカ社会病理学の流れが受けつがれ、貧困の派生的現象である非行、犯罪、離婚、自殺、アルコール中毒、売春などがアノミー概念、逸脱理論、解体論などの社会病理学の枠組によって分析され、一定の役割を果たした。

それには次のような研究がある。

・前田信一郎『犯罪社会学の諸問題』（三十年）有信堂

・磯村英一『スラム』（三三年）講談社

・大橋薫『都市の社会病理』（三五年）誠信書房

・宮出秀雄『ルンペン社会の研究』（三五年）改造社

・大橋薫『都市の下層社会—社会病理学的研究』（三七年）誠信書房

・大藪寿一『釜ヶ崎の実態』（三六年）スラムの生態

それに対してマルクス主義的社会学の立場からの研究は次の如くである。

・真田是「アノミー理論の意義と限界」（三四年）神戸女学院大学論集五卷三号「社会病理分析の視角」（三五年）社会学評論集第十卷第一号三七

・石川淳志・奥田道大「バタヤ社会における停滞と沈澱」（三六年）東洋大学社会学部紀要第二集

・小関三平「社会病理学の現実と可能—好事家的雑学からの解放をめざす一つのエスキス」（三七年）社会問題研究第十一卷第四号「現代日本の社会問題—一つの短い覚え書」（三八年）社会問題研究八—二

・北川隆吉編『疎外の社会学』（現代社会学講座第六）（三八年）有斐閣

・真田是「社会問題の構造」（三九年）ソシオロジ三九

三十年代は社会病理的、アメリカ社会学的な構造機能主義的貧困研究とそれに対立するマルクス主義的社会学の立場にあるものとの激突の時期でもある、ということをするで述べてきたが、さらに深く考察してみるとその対立はおのずと体制のとらえ方、階級意識のちがい、史的唯物論か観念論などの差異を生じている。ここではそのひとつ社会問題の認識のちがいをとりあげたい。

大橋薫氏は『社会病理学』において社会病理と社会問題についてつぎのように考えている。氏は二つの關係について伝統的な混乱があったとして二つの流れをあげている。一つはドイツ社会政策的な社会問題論（社会問題を社会や経済の仕組みの矛盾や欠陥に由来するもので、いわば巨視的な観点）、一つはアメリカ社会学的な社会問題論で（社会問題は個人、家族の事情に帰因するものとし、いはば微視的な観点からとらえる）、氏はこの二つの立場が結びつかないままに経過してきたし、それどころかある場合には相互に排斥したと分析する。そして次のように考える。^⑩

「二つの立場は当然結びつかねばならない、たしかにアメリカ社会学的な社会問題論は、個人や家庭の事情を重視する傾向は強いが、そうかといって社会や経済のしくみをまったく無視するわけではなく、さいきんはこの点に注目する者が少なくない。ただ、基本的に問題になるのは、ドイツ社会政策学的な社会問題論は、社会や経済の仕組みについては資本主義体制そのものの矛盾や欠陥を社会問題発生の元兇であるとするのに対し、アメリカ社会学的な社会問題論ではそうした発想は弱いということである。」

要するに、氏の世界問題と社会病理との關係は、基本的に相互補助的なもの、微視と巨視のちがいとしてのみ考え、一切の社会的問題を社会病理（社会解体）との関連において理解し、社会解体のうちでも、社会的に望ましくないかと判断されるが、適切な社会立法において改善されるようなものを社会問題とする。

ここには社会問題を労働問題^⑪として階級的立場に立つもの、という考えはなく、「好ましくない社会解体」を社会問題と規定する超歴史性が秘んでいる。「好ましくない社会解体」における「好ましい」、「好ましくない」といった判断は何を標準としてのものであるのか明確でない。一般に、その判断を決定したり、その決定に影響を強く及ぼすのは社会における「権威者」であり「権力者」たちである方が、そうでない人びとよりも大であること、社会

状態に対する社会問題としての規定は、階層によってかなり受けとり方にちがひがあることを考えれば、大橋氏の社会病理と社会問題の区別はつかなくなる。

社会病理学が社会問題に対して階級的な観点が欠除している以上、彼の貧困に対すアプローチは体制的にならざるを得ない。氏は磯村英一氏における偏倚の概念をさらに解体、機能の概念によって発展させる。氏の基本的立場は次の表現でなされる。¹²⁾

「解体的方針 (Disorganization) の特徴は、貧困、犯罪、離婚などのいわゆる社会病理現象を、これを発生せしめた生活過程との関連においてとらえる点にある。思うに、初期の社会問題方針 (Social Problem Approach) や社会病理学方針 (Social Pathology Approach) では、それらの現象は、そのまま病理それ自体と考えられ、それらは相互に何の関連もなくバラバラに説明されたが、解体方針では、それらは病理それ自体ではなく、その外部的徴候 (external symptoms) であり、病理それ自体はその基底すなわち生活過程の阻害にあるとされる。」ここに生活論、生活構造論の発展の始発がうかがわれる。貧困層、下層社会を分析するにおいて、その対象となる人びとはどのような生活条件のもとに、どのような生活構造をもち、どのような生活意識をもっているのかを調査し、それらがどの程度の社会的偏倚を示すかによって病理性を判定するものである。

さて、具体的に下層社会の発生条件に対する氏の考えは、巨視的には社会的、経済的条件の欠陥、そして微視的には家庭や個人のもつ、身体的、精神的、経済的、社会的、人種的、パーソナルなハンディキャップとの二つに条件は帰着すると考える。いいかえると、具体的な下層社会への落下は、巨視的な条件で落伍者が層として打ちだされ、微視的な条件や要因でもって現実には落伍するということである。これらは、マートンにおける機能論的フレームであり、またギュルヴィッチの深さの社会学にその源を有している。

大橋氏においては、巨視的条件を重視する必要を説いてはいるが、現実の家族問題における対象は、微視的分解である対象を現象的にあげるばかりで巨視的条件がそこには反映されていないことが指摘されねばならない。

三、対立の激化と現代的貧困の発展（昭和四十年代から今日まで）

三五年に始まった「高度成長」「所得倍增計画」は四十年代に入ってからその矛盾を提してきた。生活においては、三種の神器（洗濯機、掃除機、冷蔵庫）が三C時代（カラーテレビ、クーラー、カー）に移り、家庭の電化は進められた。経済的にも「いざなぎ景気」の名で呼ばれる長期間の大型好況時代をむかえたのである。これらにより国民総生産は昭和三五年には、資本主義国では世界第五位だったが四二年には英国を抜いて第三位、四三年には西ドイツをも抜いて第二位に躍進した。ここにおいて「貧乏はもうない」「豊かさにおける一部の貧困」とさえいわれた。

しかし、この日本経済の成長の早さは、経済的にも社会的にも多くの歪を生み出すことになったのである。四二年の富山県のイタイイタイ病、四日市ぜんそく、熊本の水俣病、などの産業公害が社会問題化したり、四四年には各種有害添加物による食品公害、光化学スモッグ発生という大気汚染の問題がそれである。

貧困研究においても、この時代を反映している。四四年の厚生白書において、貧困問題は「経済成長に取り残されがちな階層の問題であり、一般に国民の所得水準が上昇すれば絶対的な生活困窮という事態は解消されていくだろう。貧困という概念は相対的なものであり、高令者、身体障害者など一般の経済に遅れがちな人びとは、周囲の高い水準の生活にいつそう強い差別感、格差感を感じることになるだろう。」と解説しているが、この考えが「貧困は過去の問題」「貧困は一部特殊な問題」という通俗的理解を代表している^⑬。

貧困研究が単なる偏倚的、逸脱的な行為論でかたづけられたり、社会学から社会問題を遠ざけるしくみが、この四十年代初期にあらわれた。その意味で都市研究、病理研究で解体的研究を生活構造論と結合させたのは理論的必然といえよう。社会学において貧困がある意味でうとんじられ、軽視されつつあったころ、三十九年に『日本の公害』庄司光・宮本憲一による、新しい貧困⁴が指摘された。宮本氏のとらえる現代資本主義の貧困問題は①根源的貧困（労働条件に関連する諸問題）②現代的貧困（環境破壊、生活の質の低下、植民地の貧困問題）に分類し、その二つが同時に進行すると考える。特に現代的貧困が説得的に分析されるが、現代的貧困の例として環境破壊は緑地の砂漠化、全国約三万四千名（一九七六年二月末）の公害病認定患者、自然災害の人災的要素の増大などの他に、住宅問題、下水道、学校、保育所などの量的、質的不良をあげた。

社会学者においても地域的研究、都市化の諸問題と結びつけて公害をあつかうものが増加した。

・飯島伸子『公害および労働災害年表』（四五年）公害対策技術同友会 「産業公害と住民運動」（四五年）社会学評論二一〜二五

・間場寿一「パイパス公害と住民運動」（四五年）経済評論一二月号

・高橋勇悦「公害問題と地域住民の姿勢」（四五年）都政人七月号

・園田恭一「経営者の公害感度を衝く」（四五年）別冊中央公論経営問題九〜三

・岡田真『公害とヒューマン・エコロジー』（四六年）駒沢大学文学部研究紀要二九

・林雅孝『公害の社会学的接近』（四六年）研究通信二三

宮本氏によって発見された「現代的貧困」の意義は大きなものであった。それは三〇年代後半において、まさに貧困が見えなくなり、現実的な問題としての大衆の「生活不安」に対し説明ができなかったからに他ならない。し

かし宮本氏の「現代的貧困」はあくまでも財政論からのものであり、生活不安を体系的に説明できるものではない。そこで社会学においては、生活構造理論がいわれるようになった。

・青井和夫『都民の生活構造と生活意識』（四五年）生活構造研究会

・布施晶子「現代家族の生活構造」（四五年）佐藤晶、布施鉄治、細谷昂編『社会学を学ぶ』有斐閣

・布施鉄治「現代家族の生活構造」（四五年）『社会学を学ぶ』有斐閣

・青井和夫、松原治男、副田義也編『生活構造の理論』（四六年）有斐閣

・石川淳志「貧困」（『社会学講座一六、社会病理学』（四八年）東大出版

・園田恭一、田辺信一編『講座現代生活研究Ⅱ、生活原論』（四六年）ドメス出版

生活構造論からの貧困への接近は、経済学からだけではなく、構造機能理論からの影響も強くあらわれている。青井氏における生活構造の理論はパーソンのシステム論を受けて、生活の全体としての理解、分析をおこなっている。彼においては、貧困は生活構造と収入のアンバランスから生じるところの「背のび型」生活構造¹⁴にあり、宣伝やデモンストレーション効果の影響をうけたところに現代的貧困をみだしている。

また石川氏は、所得水準および消費水準の上昇にともなう社会的文化的欲求の増大が、よりいっその生活水準への向上を要求させるために、またマスコミによる宣伝の影響により、つぎつぎ新しい要求が拡大されるの¹⁵にみられる貧困のタイプを指摘する。田辺氏は現代の生活研究を、生活者の主体化を阻害するあらゆる条件を克服するためにあるとし、青井氏における「背のび型生活構造」を単に生活だけの概念でなく、資本主義社会における賃労働の再生産過程における、支配者からの生産点における搾取と対応させ、欲求の増大から生じる生活のアンバランスを、消費点における、支配者からの収奪と位置づけている。田辺氏の生活論を別な角度から説いているものに高野

史郎氏がある。氏は『現代の貧困と社会保障』において、欲望の一部分の不均衡な増大は、勤労大衆の正常で健康な生活要求からでてきたものではなく、都市の生活環境の悪化（狭い住居、高い住宅費、交通ラッシュ、過密人口）による心身の消耗の代償、あるいはコミニケーションの方法の変化によるものとする。加えて、消費生活様式の急激な変化はその意味で強制的であることも指摘する。

以上、生活構造論、生活原論において、現代の生活様式の変化を、どのようにとらえられているか簡単に紹介してきた。これからの貧困研究は生活様式の変化を、生活水準の上昇の証明としてとらえるのではなく、むしろ勤労大衆の生活を間接的に破壊するものであるという方向で発展していくであろう。

生活構造論以外の貧困研究としては、氏原正治郎、江口英一、津田真澄、高梨昌各氏による階層論的貧困研究も重要である。貧困化を勤労大衆の不安定化の概念で分析している。また昭和四〇年代に盛んにクローズ・アップされた老人問題に対し、家族周期論からの研究は一定の成果をあげたといえるが、周期論的貧困研究を明確に貧困研究に位置づける必要がある。

最後に今まで述べてきたことを総括的にふり返るならば次のようなことがいえるようだ。貧困という人類にとって永久的課題に対し、その現象的、あるいは窮乏化の法則性を、現実社会から抽出していくべきであるが、その際に必要なことは歴史観、世界観の相異による方法論的限界を超えて、相互の長所、すなわち貧困をどれだけ正確に把握できるのかに価値をおき、非生産的な論争や批判を繰り返してはならないということである。社会学は社会学の殻に閉じ込まらず、巨視的分析の欠陥を深く反省せねばならないだろう。

諸先生、先輩のご助言を切にお願いして小論をおわる。

註

- ① ボーダー・ライン層なる概念の出された経過については、日本社会福祉学会編『日本の貧困』一九五八年、有斐閣一〇ページを参考に。
- ② 小関三平『社会病理学と都市底辺』一九六八年汐文社。三一ページ
- ③ 磯村英一（一九〇三〜）『社会病理学』一九二九年有斐閣。一七ページ以降
- ④ 前掲『社会病理学』二三ページ以降
- ⑤ Rowntree, B. S. (1874-1954) の第一次貧困、第二次貧困という救済対策からの貧困概念にとらわれている。
- ⑥ イギリスで一九〇一年から一九四七年までつづいた公的扶助制度の一形態であるが、一八三四年の新救貧法において、有能貧民の居宅保護の禁止にみられるような、働けるか働けないかによる救済の分類方法。
- ⑦ 前掲『社会病理学』五三ページ
- ⑧ 関西社会学会編『関西社会学会のあゆみ』一九七五年。五一ページ
- ⑨ 大橋薫（一九二二〜）『社会病理学』一九六六年有斐閣。三ページ以降
- ⑩ 大橋薫前掲『社会病理学』三ページ以降
- ⑪ 大河内一男、岸本英太郎などの社会政策学者は、労働問題と社会問題を同じ意味だと主張する。この考えは、マルクスにおける窮乏化理論の重要な柱である。
- ⑫ 大橋薫著『都市の下層社会』一九六二年誠信書房。四一ページ以降
- ⑬ 貧困化に対するこのようなとらえ方に対する批判として、堀江正規「貧困化論と労働組合運動」『経済』一九七五年九・一〇月号がある。
- ⑭ 青井和夫、松原治郎、副田義也編『生活構造の理論』一九七一年。一六七ページにおいて、背のび型の生活構造こそまさに現代的貧困にはかならないとする。
- ⑮ 田辺氏は『生活原論』一四ページにおいて、大衆は、生産手段の所有者に労働力を売る過程、生産点における搾取と、生活資料の供給を依存する、消費点における収奪を問題にしている。